

樽のおにぎり

どんなに旨そうな高級料理よりも塩むすびに魅かれる私である。

テレビの時代劇で、竹の皮から取り出した白い握り飯を見ると、無性に食べたくなる。おにぎりの起源は弥生時代までさかのぼる。多くの人々にとって運動会や遠足、花見など家庭や地域の楽しい思い出と結びついて、懐かしい味の一つである。

それぞれの家によって具や形が微妙に違うおふくろの味である。

昨年度のおにぎりの売り上げは、全国で約八億個に伸びたそうである。一昨年大阪で見たおにぎりの販売店では、具の種類が百を超えていたのには驚いた。

私は時折福岡へ出かけるが、昼時になると、何か食べなきゃいけない、さて何にしたものかとあれこれ思い昼食メニューの選択に思い悩んでいた。うどん、ラーメン、チャーハン、カレーライス、寿司はやめて、もつばら塩むすびに決めてからすっきりしている。腰を下す場所さえあれば抵抗なく食べることがで

きる。

卒業式は学校の大きな行事の一つである。酒の飲めない私は式終了後の乾杯など、一応の義務？を果たし、やっと抜け出しバス停へ向かって歩き出した。ふり返ったら卒業生のD君がついてくるので「どうした」と声をかけたら「先生お願いがあるんです。私は長崎の方へ就職のため、明後日出発しますが、大変お世話になったレストランのお二人に、お礼が言いたいです。先生一緒に来て下さいませんか。お願いします。」

そう言つて頭を下げた。私も四月には故郷の島の学校へ行くことになるだろうからと思ひ同行した。

レストランに入ると主人が

「二人揃つてこりゃあ珍しい。今日は中学校の卒業式で何かとせわしかつたでしょう。本来ならD君に卒業おめでとうと言うところだが、高校へ行けなくて取り残されたような寂しさでおれているのではないかと思うと、そうも言えないなあ。酒の飲めない二人だから、送別の食事をやりましょう。母ちゃん、休業の札を頼むよ。それと料理ができるまで二人の守りを頼む」

そう言つて調理場の方へ行つた。小母ちゃんは少し緊張した顔色だったが、お茶を出した後、静かに話し出した。

「古い話です。風邪一つ引いたことのなかった私が熱を出し寝込んだのは三月でした。突然彼がやって来て部屋に入らず障子を少し開けて廊下から

『熱が高いと聞いて、じつとしておれんでやって来ました。あなたに万一のことでもあったら俺……生きていく気になれんのですよ。突然こんなことを言う私を許して下さい。あなたのいないこの世に生きていても、しょうがない。そう思うのです』

それだけ言ったかと思うと、さっと立ち上り去って行きました。後には竹の皮に包んだ三個のおにぎりがありました。親しい付き合ひもなかった、日頃無口な彼から、こんな言葉を聞いて本当に驚きました。当時彼は十余人を束ねるホテルの料理長をしていました。

若くして起用された彼の苦労は並大抵ではなかったと思います。苦労している若者を見ると親身になって世話をし、あいつ寒そうにしていたからと、買ったばかりの衣類をやったり、生活の底が抜けているので、みんなが付けた綽名はざるでした。

料理コンクールにおにぎりを出品し、多くの人を驚かしました。有名な審査員が一口食べ『うーん』とうなったそうです。特別賞に選ばれました。米・昆布・海苔など納得のいく材料が揃わないと握ることはないと聞きました。

朝から何も食べていなかった私は、おにぎりにかぶりつきました。そしてそのおいしさに驚きました。感動でのどに詰まりそうでした。あの頃の私はたしかに人間のぬくもりに飢えていたとは思うのですが、何の取柄もないただ真面目に生きて来ただけの私のような女に……と思うと涙が止まりませんでした。

翌日病院の帰り、回り道をして彼の住まいの前を通りかかると彼が庭にいました。沈丁花の生垣の前で私は立ち止まり、自分から右手を差し伸べて彼に初めて握手を求めました。彼はその手をおし頂くように

両掌で握り、涙を流しました。

三十数名ぐらいのささやかな結婚式を計画しました。式の当日、意外な方面に走り出し戸惑いました。席が百を超えていました。

仲人の挨拶の後、主人の仲間だった人が話し始めました。

「本日はホテルの社長が祝辞の予定でございましたが。代わって私ごとき者が出て来たことに、皆さん驚かれたことと思います。

四年半ほど前のことです。当時世の中の何もかもがいやになり、生きていくのが辛くなったことがありました。ホテルも止め、死に場所を求めてウロウロしていた時、本日の新郎の料理長がやって来てこう言いました。

『親より早くあの世へ行くのは、理由は何であれ人の道に反するぞ。両親をちゃんと見送ってから死ぬのなら俺は止めはしない。辛いだろが辛抱せろよ。ここに七万弍阡円ある。今から両親の顔を見て来いよ』
こう言つて金と一緒に竹の皮に包んだあの樽のおにぎりを差し出しました。その日に四国行の船に乗りました。波は高く船は揺れました。おにぎりを食べながら私は泣きました。樽以上の味でした。壹個食べべた個は両親への土産にしまいこみました。多分これが私の初めての親孝行だったと思います。

それから私は死にも狂いで働きました。現在は八人の従業員のいる小さな工場をやっています。私の後ろにいるのは四ヶ月前に結婚した私の母ちゃんです。料理長の結婚を聞き、私の計画を相談しました。そしたら

『よーし、やれ!』そう言って私の胸をドーンと突きました。

二人で今朝、女社長さんに会い、挨拶を一番先にと、お願いしました。もう一つはと言いかけたら『まだあるの』と不服そうでした。本日の結婚式の費用は全額二人で負担しますと言ったら、女社長は立ち上り、『なあば言いよつと、新郎はホテルの料理長、新婦は経理をやつていて、人情の里のホテルを企画し、多くの人に愛される宿にした功労者ですよ。あんた達二人にそんなことされたんじゃないやこっちの立場はなか!』

すごい見幕でした。しかしこれぐらいのことでしたじろぐ母ちゃんではないんです。一見優しそうに見えますが、空手三段の強者なんです。困難にぶち当たると『オリヤーツ』と怪鳥のような気合を発し勇気を奮い起こし、事に当ります。今朝もここにやつて来る途中、中年の女性のバックを引たくって逃げる若者を見ました。間髪も入れず母ちゃんの裂帛の気合が響きました。驚いた若者の足は止まり、バックを置いて逃げて行きました。母ちゃんは立ち上って

『あなた達と違って、地面を這いずり回るような生き方をして来たこの人の一生に一度あるか、ないかの願ひ事ですよ。それを壊しちゃこの人が可哀想じゃなかですか。かつて、助けて頂いた料理長への、ささやかなお礼の気持をつみ取るようなことはやめて下さいよ』

二人の睨み合いは続きました。女社長の立場を考えたのか珍しくこの日は母ちゃんが一步引き、半額づつの負担で解決しました。

式の挨拶の練習を母ちゃんの指導で、毎夜遅くまでやりましたが何の役にも立ちませんでした。折角で

すので一言申し上げます。

本日は誠におめでとうございます。お二人のお幸せを心からお祈り申し上げます」

こう言って二人は深々と頭を下げました。女社長は立ち上り目を赤くして、いつまでも拍手を続けました」

「どうもお待たせしました。母ちゃんが古い話をするので照れ臭くて、出てこれませんでした」
そう言って噂のおにぎり・味噌汁・漬け物を運んで来た。

「今日の食事がぬくもりのある思い出の一つになれば私は嬉しいですよ。さあ召し上がってください。
七年振りで握りました」

四人は無言でじっとおにぎりを見つめました。小母ちゃんは涙ぐんでいました。いままで食したことのない味に、私は驚きました。この日二人が示したこまやかな人情は、かけがえのない、いい思い出として私の胸に残りました。

